

Taro Aso & Yasuo Fukuda, LDP Presidential Candidates

本稿は英語演説の和訳として同時通訳者の底本となったもの。英語原文は後掲

平成一九年九月一九日(永)午後一二時三〇分 二時

日本外国特派員協会(有楽町電気ビル)

麻生太郎所見発表演説

衆議院議員 麻生太郎

お招きいただき、感謝いたします。

時間を節約するため、冒頭発言を英語でいたします。

皆さんの質問には、日本語で答えることにいたします。

もしわたしが立たなかったら...

経済政策と、外交政策についてお話をいたします。

但し初めに、ひとつ申し上げさせてください。

もしわたしが立候補する道を選んではいなければ、選挙は何もなかったところでした。

わたくしの相手は、政見をなにひとつ語る必要すらなかったところでした。

このレースとは皆さん、古い自民党VS新しい自民党でありま
す。

皆さんは、この古い自民党というのが、一夜にしてまとまるのを
ご覧になりました。

これはまったくのデジャブ。二〇年か、三〇年前に引き戻される
かの、感がございました。

何度も、わたくしは、自分の考えといつものを世に知らしめて参
りました。

みなさんがたこそ、ご存知でしょう。

最初にお知りになった方々と存じます。

日本が進むべき道とか、日本の取るべき政策について、わたくし
が何を大事に考えているか、といったことをであります。

わたくしの念ずるところとは、我が党党員の皆さんが、自らの信ずるところに従って、指導者を選んでほしいところ、そのようであります。

求められるリーダーとは

そんなことを申しますのも、今こそ日本は、強い指導者を必要としているからであります。

頼りになるリーダーを必要としているからです。

霞が関マシンを率いることのできる、指導者であります。

まさにそのマシンに、ついつい引きずられてしまつ、指導者ではありません。

大掛かりな、地方への権限移譲。

地方政府に、力を与えること。

年金制度の、完全な作り直し。

それから日本人にもう一度、事業家精神を与え、経済を動かすよつな一連の政策。

そつじつとを、わたくしども、やらねばなりません。

いま、やらなくてはならぬのです。

そしてそれを進めるのに、リーダーがいるのであります。

ビジョンをもって、人々を励まし、また目を開かせようつな。

そしてガッツをもって、人々を引っ張るところのよつなリーダーであります。

楽観的になれない理由が見当たらない

わたくしは、既に内政の課題に少々触れました。

内政の課題とは、日本人たちがもっている、とてもない潜在力といつものを、解き放つてやることです。

なぜならわたくしは、日本人のポテンシャルに対する信頼を、一度として失つたことがないからです。

どんなふうにして国を再建させ、そして成長するか、といつその潜在力に対して、であります。

申し上げますが、

日本といつのは、そのサイズを見ると、中国、ロシア、インドを一緒にしたのより、まだ大きい。

日本が一五%伸びますと、新しくシンガポール一国分ができません。

この点、楽観的になれない理由といつものが、わたしには全く見当たらないのであります。

では、いつやつて、これを実現しようつとしているか。

三点、あります。

その一。都市と地方の格差を埋めることです。

その二。成長を追い求め、国家を引っ張るに際し、企業の再生を図るようにして、「これに当たる」といつてあります。

そしてその三。年金制度を立て直し、人々に、未来への希望を持たせることでもあります。

「どこも通じない道」を作るのではなく

では地域の経済を、再び成長させるにはどうすればいいでしょうか。

それにはどこも通じない道路とか、なんにもつながない橋とかは必要ありません。

やらねばならないのは、地方自治体に、もっと、さばに多くの自由を与えることです。

経済を、彼ら自身に育てさせるためであります。

そうできるよう、わたしは税制を変革します。

言葉を換えますと、大掛かりな地方分権を進めて参りたい

これは、小泉純一郎さんが、やりたかったことでもありますし、わたし自身にしても、総務大臣として着手したことであります。

それでは成長の追求は、どうでしょうか。

どこに、ムダがあり、どのボタンを、最初に押すといろんな変革が起きるのか。

それを見極める、ベテラン経営者の識見が必要です。

そのボタンと、いつのを、小泉さんは郵貯に見つけました。

規制も変え方次第で成長力に

わたくしは、規制の改革を続けて参ります。もっと効果の上がる、規制改革であります。

ひとつ、例をお示します。

五年前、わたくしが自民党政調会長として、やった仕事であります。

その当時、なにか、行政の手続きに絡むことをしようとする自治体などの政府に対し、ともかく書類を紙で提出しないといけませんでした。

その数を、数えてみました。

分かったことと、いつのは、五万二〇〇種類もの手続きにおいてです。

政府に対して書類を送るか、手渡しに行くか、しないといけない

ことになっていました。

わたくしはそれを全部、変えました。

たった一本の法律、二〇〇二年法律第一五一号という、一本の法律を作ることによって、であります。

いまは全部オンラインでできます。

地方自治体の役所に、出向いて行く必要はありません。コンピューターで一回クリックすると、それで全部おしまいで

構造改革の本質

構造改革というのは、こういふものです。

日本経済のコストを下げてやることです。

それによって利幅を大きくし、株主に多くを、従業員にも多くを、払えるようにするということです。

それから年金制度について。

だれもがみな、政府から、報せを確実に受け取るようにします。

自分の年金がどうなっているか、はっきりわかるようにするためです。

これは人々を、安心させることです。

未来に、希望をもってよいと、確かに言っています。

皆さん、わたくしという人間は、日本人が何を成し遂げ得るかに関し、希望を失ったことなどありません。

「日米」をあえて語らず

外交政策に関して、二、三申し上げることいたします。

とは申しましても、日米の絆について、何事か語る必要は一切感じません。

その重要性たるや、自明であり、今後もまたそうであるからです。

それに、絆がこれほど強かったときは、今までなかったくらいであります。

もしご興味がおありになれば、「私とアメリカ」といふ題のトピセイを、二、三か月前出した本に載っています。

これを、ご覧ください。

わたしの米国観を、書いています。

アジアに話を移しますが、アジア諸国との関係を深くするため、わたしは一刻もムダにしません。

ソウルから北京、シンガポールからデリーまで、前途には多くの機会が待ち受けているからです。

麻生 李 日中外相「会談」の場所とは

「ご記憶を喚起させていただかねばなりません。

わたくしは、日本人として最初の、外務大臣でありました。

中国の台頭を「歓迎」と、オープンな形で発言した最初の外務大臣、といっております。

新聞で、このころ言っております。

中国の前の外交部長官の 李肇星さん。

この人と、わたしは、よりにもよって、トイレで小話をした、という話です。

それがきっかけになって、日中は、関係を修復できた、とっております。

打ち明けなくてはなりません。これは、実のところ、真実でありました。

ちよつとした、国家機密を漏らしてしまいました。

ともかく、李さんとわたくしは、うまく関係、実際、良好な関係を結びまして、そのことをわたしは誇りに思っております。

中国くらい、日本にとって重要な国と、いつのば、ぞらにありませぬ。

良い関係は、絶対に大切なものです。

安倍総理の功績ですが、日中間の氷は、解けてなくなりました。

これに、わたしはとても喜んでおります。

経済的繁栄と民主主義 平和と幸福

それからわたくしが、中国の将来に関し、はなはだ強気である。このことも、思い出していただかなくてはなりません。

皆さん

平和と、幸福といつものは、いつも、経済の繁栄、それに民主主義といつものと、車の両輪のようについて、進みます。

わたくしは、いまこの地域に起きようとするところについては、まねてく

これである、と思っております。

インドネシアで起きてくる、それから中国でも、であります。

それを申しますなら、ほとんど至るところで、と申してもいいでしょう。

カンボジアから、カザフスタン、グルジアから、ラトビア。

もしも、このように国々に、日本のプレゼンスがあったら、ということですね。

何事か、役に立つであろう、と思います。

「自由と繁栄の弧」をつくるとは

と言いますのも、二年ちかく前ですか、わたくしはこの場所
で申し上げました。

日本とこの国は「been there done that」の国だからです。

いい時と、悪い時と、ともに経験している。

成功があれば、失敗の経験もある、そういう国が日本だから
あります。

このひとつの確信があったので、わたしは外務省の連中と一緒
にやりました。

そして、新機軸をひとつ打ち出しました。

それが、「自由と繁栄の弧」をつくるということなのです。

但しお忘れいただきたくは、ありません。

これは私の私独自の政策だと、言われるかもしれませんが。

事実はどういつ、誰しもの政策でもあります。

要するに、日本自体の政策だからです。

時計の針を逆には回させない

最後になりました。

自衛隊の男女の皆さんの、ご努力。

その献身ぶり、規律。

イラクの地において、インド沖の大洋において、彼らがそれらを
示されるということが、仮になかったとしたら、わたくしども、
ここまで来ることが、できてはいないところでありました。

この人たちが、NATOや、それから米国の同僚たちから勝ち得
た敬意、というもの。

それは、わたくしにとつて、今日に至るまで、大いなる誇りの源
泉たり続けております。

わたくしは、時計の針を逆には回させません。

外交分野において。

内政の側面において。

そして、わたくしが最も大切に思う、政党において、でありま
す。

ご清聴ありがとうございました。

（了）